

大学

スポーツを通じて 国際協力に貢献

2014年4月、学内に「国際交流センター」が新設されました。日本政府が掲げたスポーツを通じた国際協力「スポーツ・フォー・トゥモロー」プログラムの取り組みに対して、本学も体育・スポーツを通じた国際協力・国際交流の推進を掲げ、活動していくためです。

私自身は大学卒業後、日系社会青年ボランティアの野球隊員としてブラジルで2年間活動しました。多様な価値観に触れ、私の人生を大きく変えてくれました。その体験から、多くの学生、そして卒業生に開発途上国に飛び出してほしいと思います。また、本学の資源を



日本体育大学 国際交流センター／野球部コーチ

黒木 豪さん

生かして、学校体育のシステム構築、スポーツイベントの開催、人材育成など、途上国でのスポーツ環境の整備に貢献できるのではないかと考えています。

卒業後でなければ参加できない長期ボランティアだけでなく、現役学生も参加できる方法を模索し、2014年3月には約1カ月間、ブラジルに野球部員15人を派遣し、日系人の学生さんたちを対

象に野球教室を開きました。

これからもJICAと連携し、カンボジア、ネパールにも短期ボランティアを派遣する予定です。こういった派遣を増やすことで、将来的には、長期ボランティアへの参加を推進していきたい。そして青年海外協力隊に参加した卒業生たちが、2020年東京オリンピックで活躍してくれるよう願っています。



昨年3月にブラジルで現地の子どもたちに投球指導する日体大の野球部員

地方自治体

住民の心に 火を付ける力を育む

京都市では青年海外協力隊をはじめJICAボランティア経験者の活動に感銘を受け、採用試験に彼らを対象とした特別枠を設け、これまで教員40人、職員25人を採用しました。

地方自治体の職員には、住民の方々の心に火を付け、地域の最大の宝である住民力を引き出す職員力が求められています。そのためには、高い志を持ち、心が燃えていなければなりません。JICAボランティアの経験者を迎えたい最大の理由は、彼らが持つ高い志と実践力に他なりません。

困難な課題を抱えた国に赴き、言葉



京都市長

門川 大作さん



「JICAボランティア経験者が京都市に貢献できること」をテーマに市長と意見交換

も通じない、時には善意すらも通じない中で、全力を振り絞って活動する。それをやり遂げることができるのは、彼らに人や社会のために貢献したいという高い志があるからこそです。

実際に京都市の教員・職員となっても、臆せず保護者・住民の懐に飛び込んでいく挑戦心があるという評価が多く、私も心強く感じています。そのよう

に1歩、2歩と踏み込んだ仕事こそ、将来、意義のある結果を生み出せるからです。

世界を視野に物事を考えることはもちろんのこと、日本の文化や伝統もよく理解されているJICAボランティア経験者の皆さんに、ぜひ今後も京都市の未来をつくる仕事に参画していただきたいと考えています。

特集 青年海外協力隊
つないだ、つながった50年

企業

海外展開に欠かせない開拓精神

日本の種苗業界の中でも、早くから海外市場や海外の種子産地の開拓を目指していたこともあり、海外に強い人材が必要でした。そこで出会ったのが青年海外協力隊の経験者。1973年以来採用を継続しており、現在は22人が働いています。

野菜隊員としてブータンで活動した社員は品種改良に力を注ぎ、村落開発普及員としてチリで活動していた社員は、中南米の種苗会社と種子生産の交渉などに奮闘しています。私がキューバに出張した際に同行してもらったことがあ

りますが、現地の人々が舌を巻くほど上手にスペイン語を話していました。また、言語だけでなく彼らの持つコネクションを通して、現地との深いつながりができたこともありました。

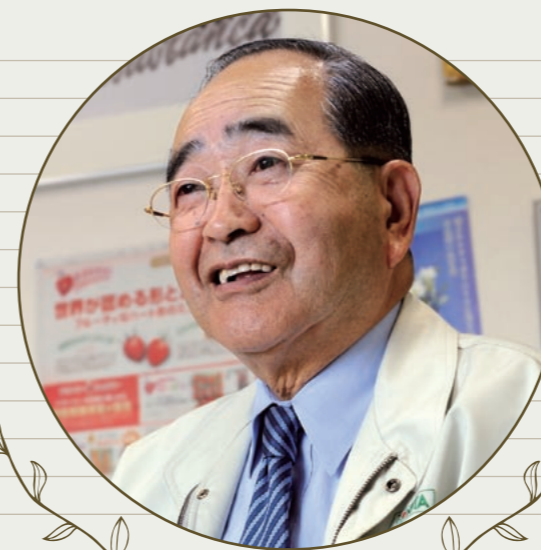
協力隊経験者の社員に共通している特徴は、開拓精神に富んでいること。海外での仕事や未知の分野、新しいビジネスなどに挑戦してみようという気持ちが強い人が多い。また、柔軟性や社会性があり、謙虚な人も多く、新たな業務になじむのも早いと思います。

国内の種苗市場は小さくなっています



イタリア野菜の展示会で、国内栽培用に品種改良した種子について説明する協力隊OB

が、海外ではまだまだ開拓の可能性が十分にあります。物おじせずに道を切り開いていける協力隊経験者とともに、海外展開を通じてさまざまなことに挑戦していきたいと思っています。



トキタ種苗株式会社 代表取締役会長

時田 勉さん

協力隊の 経験が生きる

開発途上国で文化や習慣の違いに直面しながら、より良い社会のために現地の人たちと奮闘する青年海外協力隊。その経験が、日本各地のさまざまな場所で花開いている。